

第3章

共通参照レベル (Common Reference Levels)

3.1 共通参照レベルの能力記述文(descriptor)の基準

CEFの目的の一つは関係者が現在の基準やテスト、試験によって得られた熟達度のレベルを記述する作業を楽にすることである。また、そのことによって異なる資格間の比較も容易にもなるはずである。この目的のために、能力記述文一覧(Descriptive Scheme)と共通参照レベルは開発された。両者間に共通の概念一覧も示しておいたので、CEFの利用者は各々のシステムの記述にそれを活用されたい。CEFの共通枠組みの尺度は理想的には次の四つの基準を満たすべきであろう。前の二つは記述に関係し、後の二つは測定の問題である。

能力記述文(descriptor)の問題

- CEFの尺度は、異なる個々のコンテキストで一般化された結果を配慮する必要から、コンテキストの制約を受けない(context-free)ことがのぞましい。つまり、共通の尺度というのは、学校向けに作り、それを成人向けに適用するといったような、またはその逆のような、個別に作るものではない。また同時に、CEFの尺度の能力記述文はコンテキストに関連している(context-relevant)必要もある。個別的に、しかも全ての重要なコンテキストを反映できていなければならないし、それぞれのコンテキストへの翻訳も可能でなければならない。もしくは当該のコンテキストで用いられた機能に対しても適切な内容でなければならない。このことは、様々なコンテキストにおいて「学習者は何ができるか」を記述する諸カテゴリーが、その対象となる学習母集団の中の様々なグループのおかれているコンテキストでも通用しなければならないことを意味する。
- 能力記述文はまた、言語能力の理論に基づいている(based on theories)必要もある。これは達成するのが難しい。というのも、利用できる理論や研究というのはこのような能力記述文の基盤を提供するような性質のものでないからである。それにもかかわらず、カテゴリーの分類や能力記述文には理論的裏付けがなければならない。加えて、理論関連の箇所であっても、記述は利用者にとって使い難くならない(user-friendly)。すなわち、教育の現場関係者(practitioners)が利用できるということである。これによって、教育の現場関係者もそれぞれのコンテキストの中でどのような能力が問題になるのか、より深く考えを進めることができるはずである。

測定(measurement)の問題

- それぞれの言語活動や能力がCEFの尺度表のどこに位置づけられるかという測定のポイントは、測定の理論に基づいて客観的に決定されなければならない(objectively determined)。これは根拠のない慣習や特定の教育の現場関係者の「経験則」を受け入

れたり、既存の尺度を参照することから体系化の際に犯す過ちを避けるためである。

- ・ 測定レベルの数(number of levels)は、様々な分野での進歩を示すことができるだけの適当な数が必要ではないが、いかなるコンテキストにおいても、いつでも無理なく、一貫して区別ができる数を超えてはならない。これは異なる次元ごとに異なる幅の測定段階を採用すること、または(共通、普通の)広めのものと(局所的な、教育領域別の)狭めのものという二系列を用意することを意味するかもしれない。

これらの基準を満たすことは難しいが、個々の置かれている立場を考える上で参考になる。これらの条件は実際には直感的、質的、量的な方法の組み合わせによって満たされる。これは言語熟達度の尺度が開発されてきた、通常の純粋に直感的方法とは対照的である。ある特定の尺度作成委員会による直感的なやり方は、特定のコンテキストのためのシステム開発には十分機能するかもしれないが、共通の尺度の開発となると限界がある。直感に頼る第一の弱点は、ある特定レベルに適用したある特定の言い回しが主観的にならざるを得ないということである。第二に、分野が異なる使用者であれば、尺度について異なる見方をするかもしれない。しかしそれは自らの生徒の必要性から生じたものであり、正当な見方だということも有り得るのである。ある尺度、例えば、テストは、十分に有効だと示されたコンテキストの中では妥当性(validity)を持っているであろう。尺度の妥当性の確認は、いくらかの量的な分析を含むもので、これは理論的には終わりのないプロセスであり、絶えず進化して行くはずのものである。共通参照レベルと例示的能力記述文(illustrative descriptors)を開発する際に用いられた方法は、それゆえに非常に厳格なものであった。直感的、質的、量的な方法の体系的な組み合わせが用いられたのである。最初に、これまでの尺度の内容を CEF の能力記述文のカテゴリーと照らしあわせて検討した。次の直感段階で素材が編集され、新しい能力記述文が言語化され、対象となる尺度全体が専門家によって討議された。次には質的方法をいろいろ使って、選択された能力記述文のカテゴリーを実際に教師達が使えるか、それらが実際に教師達が意図するカテゴリーを充分記述しているかを検討した。最後に、一連の能力記述文中の最も優れたものについて量的方法を用いて尺度化した。その尺度の精度はその後反復追検証されている。

開発に関わる技術的な問題と言語熟達度における能力記述文の尺度は、付録のなかで考察されている。付録 A では尺度と尺度化、それに CEF の開発に際して採用した方法とを紹介している。付録 B は共通参照レベルを開発した Swiss National Science Research Council の概要を伝え、その例示的能力記述文を概説しているが、これは様々な教育分野をカバーするためのプロジェクトの一つであった。付録 C と D は 2 つの関連したヨーロッパのプロジェクトを紹介している。この 2 つのプロジェクトは似た方法を用いて青少年向けの能力記述文を開発し、有効性を検証している。付録 C では DIALANG プロジェクトが記述対象になっている。より広範囲の評定機構の一部として、DIALANG は CEF から自己評定用の能力記述文を拡大適用している。付録 D では ALTE の 'Can do' プロジェクトを取り上げている。このプロジェクトは能力記述文の体系を開発し、その有効性も検証されているが、それらは共通参照レベルとの関連で評価できるものである。¹これらの能力

¹ この部分は著作権の関係から本書では訳出していない。

記述文は成人にとって重要な領域との関係で作られた CEF のそれを補完してくれるものである。

付録で紹介するプロジェクトの結果は、共通参照レベルとも、例示的能力記述文で尺度化された概念ともかなりの一致を見せている。これは、上記で概観した基準が、例え部分的であっても満足のいくものだということを示す証拠がどんどん寄せられていることを物語っている。

3.2 共通参照レベル(The Common Reference Levels)

言語学習の仕組みや達成度の一般的認識については、適当とされるレベルの数とその内容について、普遍的とは言えないまでも、かなりの一致が実際には存在するようである。ヨーロッパの言語学習者にとって意味を持つ学習行程の区間は、大まかに六つのレベルが適当だと考えられているようである。

- Breakthrough: 1978年の提言の中で Wilkins が名づけた「当初の熟達度」(Formulaic Proficiency) や Trim の同年出版での「入門」(Introductory)に相当する。
- Waystage: Council of Europe が詳述したもの(content specification)の反映。
- Threshold: Council of Europe が詳述したものの反映。
- Vantage: Council of Europe が三番目に詳述したものの反映。Wilkins では「操作能力が限定されている熟達度」(Limited Operational Proficiency)、Trim では「普通の状況での適切な反応」(adequate response to situations normally encountered)として説明されるレベルのこと。
- Effective Operational Proficiency(効果的に操作が可能な程度の熟達度): Trim は「効果的な熟達度」(Effective Proficiency)と呼び、Wilkins は「適切な操作が可能な熟達度」(Adequate Operational Proficiency)と呼んでおり、より複雑な作業や学習課題をこなしうる上級レベルを示している。
- Mastery(熟練): (Trim:「総合的な熟練」(comprehensive mastery); Wilkins:「総合的に操作できる熟達度」(Comprehensive Operational Proficiency)ALTE で採用された概要の中で最も上位の検定目標に相当する。言語を専門とする人たちによって達成されるレベルを超え、より高度の異文化適応能力(intercultural competence)を含むように拡大解釈することも可能である。

この六つのレベルは、古典的な初級、中級、上級という区別をさらにそれぞれ高、低の二つに分けたとも見える。また、これらのレベルに Council of Europe が与えた名前には翻訳しにくいものがあることがわかっている。例えば、Waystage や Vantage などである。それゆえ、下の図は最初に三つの大きなレベル、A、B、C に分け、それをさらに枝分かたせ「枝分かたれ方式」(hypertext)を採用している。

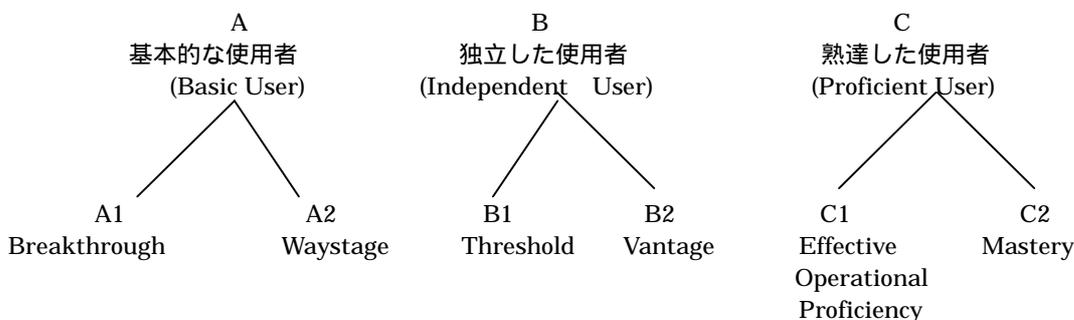


図 1

3.3 共通参照レベルの提示方法

CEF が共通の参照点を決めたとしても、それは異なる教育文化の異なる担当者がどのように自分たちのレベルや単元の体系を構築し、記述するかを決して制限するものではない。参照点や能力記述文の正確な言語化の進展は、関係国や諸機関の経験が、関係する専門家達の経験に基づいて、能力記述文に統合されていくことによって実現されることを期待したい。

また、共通の参照点はそれぞれの目的によって異なる方法で示されることが望ましい。目的によっては表 1 で示したように、共通参照レベルの組み合わせを一つの段落にまとめて提示することが適切かもしれない。このような単純で「全体的な」提示は専門家でない利用者にとって体系がわかりやすくなるし、教師やカリキュラムの計画担当者にとっても立脚点を与えるものになるだろう。

表 1: 共通参照レベル：全体的な尺度

熟達した使用者	C2	聞いたり、読んだりしたほぼ全てのものを容易に理解することができる。 いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構成できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができ、非常に複雑な状況でも細かい意味の違い、区別を表現できる。
---------	----	---

使用者	C1	<p>いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。</p> <p>言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現することができる。</p> <p>社会的、学問的、職業上の目的に応じた、柔軟な、しかも効果的な言葉遣いができる。</p> <p>複雑な話題について明確でしっかりとした構成の詳細なテキストをつくることができる。その際テキストを構成する字句や接続表現、結束表現の用法をマスターしていることが伺える。</p>
独立した使用者	B2	<p>自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主な内容を理解することができる。</p> <p>お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい流暢かつ自然である。</p> <p>かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストをつくることができ、様々な選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。</p>
	B1	<p>仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解できる。</p> <p>その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、大抵の事態に対処することができる。</p> <p>身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のあるテキストをつくることができる。経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができる。</p>
基本的な使用者	A2	<p>ごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関するよく使われる文や表現を理解できる。</p> <p>簡単に日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。</p> <p>自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。</p>
	A1	<p>具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。</p> <p>自分や他人を紹介することができ、どこに住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりできる。</p> <p>もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船をだしてくれるなら簡単なやり取りをすることができる。</p>

ある実際的な目的のための教育システムの内部にいる、学習者、教師や他の利用者に分かってもらうためには、より詳細な一覧が必要になってくるだろう。このような全体像は、主な言語使用のカテゴリーと六つのレベルをそれぞれ縦軸と横軸にした表の形で示すことができよう。表2は六つのレベルに基づいた自己評価用の表の案である。学習者はこれを

使えば、自分の主な言語技能の全体像がわかり、自分の熟達度レベルを自己評定するためには、より詳細な記述のチェックリストを使って、そのどこを見ればいいのかわかるようになっている。

目的が異なれば、特定のレベル、特定の領域・範囲、また特定のカテゴリー群に焦点を絞ることが要求されるだろう。また、あるレベルやカテゴリーを削り、その一方である特定の目的にとって意味があるところでは、より詳細な細かいレベルを設定し、新しいカテゴリーなどを付け加えることも可能であろう。このような詳細な設定によって、それぞれの単元がお互いに関連づけられるであろう。CEF との位置関係もはっきりするであろう。

コミュニケーション活動のカテゴリーの全体像を描く代わりに、その活動の観察から推測できるコミュニケーション言語能力のいろいろな側面を基盤にして、言語行動を評定することを望む向きがあるかもしれない。表 3 は話す活動の評定を目的としている。また、表 3 は言語使用の質的な諸側面にも焦点を当てている。

3.4 例示的能力記述文(illustrative descriptors)

共通参照レベルで紹介された三つの表(表 1~3)は付録 B で紹介する研究プロジェクトが CEF のために開発、検証した「例示的能力記述文」をまとめたものである。これらの記述文は、上述のプロジェクトが多くの学習者を対象に評定を行った際の解釈方法を、分析して数学的に尺度化したものである。

参照しやすいように、能力記述文の尺度は第 4 章、第 5 章の能力記述文一覧の重要なカテゴリーに並置してあるが、それらは次の三つの大きなカテゴリーに関連したものである。

コミュニケーション活動(communicative activities)

「ができる」型の能力記述文は受容、言葉のやり取り、創造(production)を記述するために書かれているが、どのレベルにも対応する下位カテゴリーが全てあるわけではない。というのも、活動のなかにはある能力のレベルまで達しないと行われ得ないものや、高いレベルだと評価の対象にならない活動もあるからである。

方略(strategies)

「ができる」型の能力記述文はコミュニケーション活動を行う際に採られる方略のために挙げられている。方略は学習者の資質と、できること(コミュニケーション活動)をつなげるものと見られている。a)行動計画 b)資質の考慮と実際行動の際の不足の補完 c)結果を検討し、必要なら修正を行うこと、これらについては、やり取りや創造的言語活動の方略とかわる第 4 章で採り上げる。

表 2 : 共通参照レベル : 自己評定表

		A1	A 2
--	--	----	-----

理解すること	聞くこと	はっきりとゆっくりと話してもらえれば、自分、家族、すぐ周りの具体的なものに関する聞き慣れた語やごく基本的な表現を聞き取れる。	(ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、近所、仕事などの)直接自分につながるのある領域で最も頻繁に使われる語彙や表現を理解することができる。 短い、はっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を聞き取れる。
	読むこと	例えば、掲示やポスター、カタログの中のよく知っている名前、単語、単純な文を理解できる。	ごく短い簡単なテキストなら理解できる。 広告や内容紹介のパンフレット、メニュー、予定表のようなものの中から日常の単純な具体的に予測がつく情報を取り出すことができる。 簡単で短い個人的な手紙は理解できる。
話すこと	やり取り	相手がゆっくり話し、繰り返したり、言い換えたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現するのに助け船をだしてくれるなら、簡単なやり取りをすることができる。 直接必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりできる。	単純な日常の仕事の中で、情報の直接のやり取りが必要ならば、身近な話題や活動について話し合いができる。 通常は会話を続けて行くだけの理解力はないのだが、短い社交的なやり取りをすることはできる。
	表現	どこに住んでいるか、また、知っている人たちについて、簡単な語句や文を使って表現できる。	家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴を簡単な言葉で一連の語句や文を使って説明できる。
書くこと	書くこと	新年の挨拶など短い簡単な葉書を書くことができる。 例えばホテルの宿帳に名前、国籍や住所といった個人のデータを書き込むことができる。	直接の必要のある領域での事柄なら簡単に短いメモやメッセージを書くことができる。 短い個人的な手紙なら書くことができる:例えば礼状など。

		B 1	B 2
理解すること	聞くこと	<p>仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、明瞭で標準的な話し方の会話なら要点を理解することができる。</p> <p>話し方が比較的ゆっくり、はっきりとしているなら、時事問題や、個人的もしくは仕事上の話題についても、ラジオやテレビ番組の要点を理解することができる。</p>	<p>長い会話や講義を理解することができる。</p> <p>また、もし話題がある程度身近な範囲であれば、議論の流れが複雑であっても理解できる。</p> <p>たいていのテレビのニュースや時事問題の番組もわかる。</p> <p>標準語の映画なら大多数は理解できる。</p>
	読むこと	<p>非常によく使われる日常言語や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。</p> <p>起こったこと、感情、希望が表現されている私信を理解できる。</p>	<p>筆者の姿勢や視点が出ている現代の問題についての記事や報告を読める。</p> <p>現代文学の散文は読むことができる。</p>
話すこと	やり取り	<p>当該言語圏の旅行中に最も起こりやすい大抵の状況に対処することができる。</p> <p>例えば、家族や趣味、仕事、旅行、最近の出来事など、日常生活に直接関係のあることや個人的な関心事について、準備なしで会話に入ることができる。</p>	<p>流暢に自然に会話をすることができ、母語話者と普通にやり取りができる。</p> <p>身近なコンテキストの議論に積極的に参加し、自分の意見を説明し、弁明できる。</p>
	表現	<p>簡単な方法で語句を繋いで、自分の経験や出来事、夢や希望、野心を語るすることができる。</p> <p>意見や計画に対する理由や説明を簡潔に示すことができる。</p> <p>物語を語ったり、本や映画のあらすじを話し、またそれに対する感想・考えを表現できる。</p>	<p>自分の興味関心のある分野に関連する限り、幅広い話題について、明瞭で詳細な説明をすることができる。</p> <p>時事問題について、いろいろな可能性の長所、短所を示して自己の見方を説明できる。</p>

書くこと	書くこと	身近で個人的に関心のある話題について、つながりのあるテキストを書くことができる。私信で経験や印象を書くことができる。	興味関心のある分野内なら、幅広くいろいろな話題について、明瞭で詳細な説明文を書くことができる。 エッセイやレポートで情報を伝え、一定の視点に対する支持や反対の理由を書くことができる。 手紙の中で、事件や体験について自分にとっての意義を中心に書くことができる。
------	------	--	---

		C 1	C 2
理解すること	聞くこと	たとえ構成がはっきりしなくて、関係性が暗示されているに過ぎず、明示的でない場合でも、長い話が理解できる。 特別の努力なしにテレビ番組や映画を理解できる。	生であれ、放送されたものであれ、母語話者の速いスピードで話されても、その話し方の癖に慣れる時間の余裕があれば、どんな種類の話し言葉も難無く理解できる。
読むこと	読むこと	長い複雑な事実に基づくテキストや文学テキストを、文体の違いを認識しながら理解できる。 自分の関連外の分野での専門的記事も長い技術的説明書も理解できる。	抽象的で、構造的にも言語的にも複雑な、例えばマニュアルや専門的記事、文学作品のテキストなど、事実上あらゆる形式で書かれた言葉を容易に読むことができる。
話すこと	やりとり	言葉をことさら捜さずに流暢に自然に自己表現ができる。 社会上、仕事上の目的にあった言葉遣いが、意のままに効果的にできる。 自分の考えや意見を正確に表現でき、自分の発言を上手に他の話し手の発言にあわせることができる。	慣用表現、口語体表現をよく知っていて、いかなる会話や議論でも努力しないで加わることができる。 自分を流暢に表現し、詳細に細かいニュアンスを伝えることができる。 問題があっても、周りの人がそれにほとんど気がつかないほどに修正し、問題点をうまく繕うことができる。
	表現	複雑な話題を、派生的問題にも立ち入って、詳しく論ずることができる。一定の観点を展開しながら、適切な結論でまとめ上げることができる。	状況にあった文体で、はっきりとすらすらと流暢に記述や論述ができる。効果的な論理構成によって聞き手に重要点を把握させ、記憶にとどめさせることができる。

書くこと	書くこと	<p>適当な長さでいくつかの視点を示して、明瞭な構成で自己表現ができる。</p> <p>自分が重要だと思う点を強調しながら、手紙やエッセイ、レポートで複雑な主題を扱うことができる。</p> <p>読者を念頭に置いて適切な文体を選択できる。</p>	<p>明瞭な、流暢な文章を適切な文体で書くことができる。</p> <p>効果的な論理構造で事情を説明し、その重要点を読み手に気付かせ、記憶に留めさせるように、複雑な内容の手紙、レポート、記事を書くことができる。</p> <p>仕事や文学作品の概要や評を書くことができる。</p>
------	------	---	---

表 3：共通参照レベル：話し言葉の質的側面

	使用領域の幅	正確さ
C2	細かい意味のニュアンスを正確に伝えたり、強調したり、区別したり、あいまいさを避けるために、いろいろな言語形式で自由に言い換えができ、非常に柔軟に考えを表現できる。慣用表現、口語体表現も上手に用いることができる。	例えば、先を考えたり、他人の反応に注意を向けながらも、複雑な言葉を文法的に正しく使える。
C1	幅広い言葉の使いこなしができ、一般的、学術、仕事、娯楽の幅広い話題について、言いたいことを制限せずに、適切な文体ではっきりと自分を表現できる。	文法的な正確さを大体において維持することができる。誤りはめったにないし、まず気付かれないし、実際に犯したとしても大抵は自分で訂正できる。
B2+		
B2	十分に言葉を使いこなすことができ、一般的な話題についてなら、ある程度複雑な文を用いて、言葉をわざわざ捜さなくても自分の観点を示し、はっきりとした説明をすることができる。	比較的高い文法能力を示す。誤解を起こすような誤りはしない。たいていの間違いは自分で訂正できる。
B1+		
B1	家族、趣味、興味、仕事、旅行、現在の出来事のような話題について、流暢ではないが、言い換えを使いながら表現するだけの語彙を十分に有している。	予測可能な状況で、関連した非常によく用いられる「決まり文句」や文型をかなり正確に使える。
A2+		
A2	覚えたいいくつかの言い回しや数少ない語句、あるいは定式表現、基本的な構文で、簡単な毎日の状況で限られた情報を伝えることができる。	まだ基本的な間違いが決まったところででってくるが、いくつかの単純な構造を正しく用いることができる。
A1	個人についての情報や具体的な状況に関する基本的な語や言い回しは使える。	限られた文法構造しか使えず、構文も暗記している範囲でのみ使える。

	流暢さ	やり取り	一貫性
C2	自然な流れの口語体で、ある程度の長さの自己表現ができる。難しいところは避け、修正を円滑に行い、相手がそれと気がつかないくらいである。	非言語記号、あるいはイントネーション記号を選んで使い、明らかに無理せずに軽々と上手に会話を行うことができる。発言の機会を自然に上手につかみ、前の発言に言及したり示唆したりしながら、会話の流れに寄与することができる。	適切に多様な談話構築手法と幅広い接続表現、結束手段を用いて、具体性があり、脈絡があり、また一貫性のある談話を行うことができる。
C1	概念化が難しい時にのみ、言葉の自然な滑らかさが妨げられるが、それ以外は、流暢に自然にほとんど苦労せずに自己表現できる。	手持ちの談話表現からふさわしい語句を選んで、自分の話を切り出したり、話を続けることができる。自分の発言を他の話し相手の発言に関係づけられる。	談話構築手法、接続表現、結束手段が使いこなせ、明瞭で流れるような、構成の整った話しをすることができる。
B2+			
B2	文例や表現を探すのに詰まったりするが、気になるような長い休止はほとんどなく、ほぼ同じテンポである程度の長さで表現ができる。	いつもエレガントとはいかないが、適切に発言の機会を得たり、必要なら会話を終わらせることができる。身近な話題の議論で、人の発言を誘ったり、理解を確認したり、話しを展開させることができる。	使うことができる結束手段は限定されており、長く話すとなるときこちなさがあるが、発話を明瞭で一貫性のある談話につなげることができる。
B1+			
B1	特に長い一続きの自由な発言をするときに、文法を考えたり語彙を搜したりする際の言いよどみや言い直しが多く、修正が目立つが、分かりやすく話を進めることができる。	身近な個人的な関心事について、一対一なら、話をはじめ、続け、終わらせることができる。お互いの理解を確認するために、誰かが言ったことを部分的に繰り返して言うことができる。	一連の短い、不連続な単純な要素を連結して、直線的な発話ができる。
A2+			
A2	休止が目立ち、話し出しの仕方を間違いや、言い直しが非常にはっきり見られるが、短い話しならできる。	質問に答えられ、簡単な話しに対応することができる。自分で会話を続けることができる程には十分に理解できていないことが多いが、話しについていることを分からせることができる。	'and'、'but'、'because'などの簡単な接続表現を使って言葉のまとまりを結びつけることができる。
A1	表現を探したり、あまり知らない語を発音したり、コミュニケーションを修正するためにつかえつかえ話すが、単発的な、予め用意された発話ならすることができる。	個人的な事柄について詳しく質問をしたり、答えることができる。繰り返し、言い換え、修正に完全に頼ったコミュニケーションではあるが、簡単な会話はできる。	語のまとまりや単語を'and'、'then'などのごく基本的な接続表現を使って結びつけることができる。

コミュニケーション言語能力

言語能力の諸相や言語運用能力、社会言語的能力に関しても尺度化した能力記述文が与えられている。ある種の能力の側面は全てのレベルで定義可能というわけではなさそうである。意味があると見なされたときにだけ区別することにした。

能力記述文は概観を可能にするためにいつも全体的でなければならない。ミクロ機能、文法形式、語彙の詳細なリストについては特定の言語特有の形で示されたものがある(例：Threshold Level 1990)。尺度をつかって記述されているコミュニケーション課題をこなすために必要な、いろいろな機能、概念、文法、語彙を分析することは、言語項目全体を新たに作り直す過程の一部とはなるであろう。このような単元に含まれた一般的能力(例えば、世界に関する知識、認知技能)も似たような形式で表に作るができるだろう。

第4章、第5章にテキストと併記してある能力記述文は：

- ・ 熟達度の定義に現に関わっている複数の研究組織の経験を利用している。
- ・ (a) 著者グループの理論的な作業、(b) 現存する熟達度の尺度の分析 (c) 教師も参加した実践的ワークショップ、この三つの相互の連絡、共同作業により、第4章、第5章で示されるモデルの開発と補完させあひながら開発された。第4章、第5章であげる表は、本文で採り上げたカテゴリーすべてを完全に包括するものではないが、能力記述文の組み合わせのありうる一つの形を示したものである。
- ・ 共通参照レベルの枠組みに合わせてある：A1(Breakthrough), A2(Waystage), B1(Threshold), B2(Vantage), C1(Effective Operational Proficiency), C2(Mastery)。
- ・ 付録Aで概略を述べた基準に合わせ、効果的な能力記述文となるよう、どれもが簡潔ではっきりとし、明確で、肯定的な表現形式をとり、確定的な記述がなされ、独立性をもち、独自に用いることができるようにしてある。その解釈のために他の記述文を参照比較しなくてもよいようにしてある。
- ・ 一連の性格を異にする教育分野の、多種多様な言語訓練、教育の経験を持つ非母語話者および母語話者の教師たちから、明確であり、利用し易く、有用であるとの判断を得ている。教師達は、彼ら自身も参加したワークショップで、幾千もの例を練り上げて作ったこの能力記述文を、よく理解しているようである。
- ・ 低学年、高学年、職業教育、成人教育での実際の学習者の到達点を記述するのに有用であり、従って現実的な目標を示すことができよう。
- ・ 共通尺度として「客観的に計測されている」(例外は記してある)。これは、尺度表に取り上げられている能力記述文の大部分は、学習者の達成度を評定し、解釈する際にとられた方法の結果であり、尺度表の作成者の見解だけに基づいている訳ではないということである。
- ・ 外国語の熟達度の連続的な発展の基準を並べて与えてあるから、基準に基づいた評定方法を開発しようとする際、柔軟に活用できる。当該地域の制度に適合させることも、地域の経験に従って精緻化することも、また新しい学習目標を開発するのにも使えるようになっている。

この枠組表は、完全に包括的というわけではないし、(多言語かついろいろな領域分野の)

教育の場での外国語学習というただ一つのコンテキストの中で尺度化されたものではあるが、以下の性質を持つ：

- ・ 柔軟である (flexible)：ここで行われている能力記述文の同じ枠組みを使って、Rüschlikon シンポジウムが認定した広汎な「慣習的なレベル」に編集し直せる。また、European Commission の DIALANG プロジェクトや ALTE でもこの枠組みが使われている。これらはまた、より狭い「教育的レベル」としても使うことができる。
- ・ 内容的な一貫性を持つ (coherent)：異なる記述文中にあっても、類似の、もしくは同じ要素は同じ尺度価値を持つことが分かっている。これらの尺度価値は、基となった言語熟達度の尺度を作成した者達の意図とも大部分一致している。また、これらは一貫して Council of Europe の決めた内容にも DIALANG や ALTE によって提案されているレベルにも一致している。

3.5 枝分かれ方式の柔軟性

A1 レベル(Breakthrough)はおそらく、言語熟達度生成の中、最も低い「レベル」であろう。この段階に達する前には、学習者が限られた幅の言語を効果的に用い、当該学習者の需要に欠かせない作業課題をこなすという段階があるかも知れない。1994年から1995年にかけての Swiss National Science Research Council の調査は、例示的能力記述文を開発、尺度化したのだが、一連の単独課題の遂行に際して、限定された言語使用の事例があることを確認している。それらは A1 レベルの定義の前提とされているものである。あるコンテキストでは、例えば、若い学習者には、「道しるべ」のようなものを細かく立ててやることも検討に値するかもしれない。次の能力記述文は、簡単で一般的な作業課題を示したものであるが、A1 レベル以下の尺度であり、初めて外国語を学習する人にとっては有意義な目標設定になりうるであろう。

- ・ 簡単な語句を発することができるが、その際指し示すなどの身振りで言語による指示を補強することができる。
- ・ 日、時間、日付など尋ねたり、言ったりできる。
- ・ 簡単な挨拶の表現を使える。
- ・ 「はい、いいえ、すみません、どうぞ、ありがとう、ごめんなさい」が言える。
- ・ 個人的情報、名前、住所、国籍、未婚・既婚などを、簡単な書式に書き込むことができる。
- ・ 短くて単純な葉書が書ける。

以上の能力記述文は旅行者などの「現実の生活」に関わってくる。学校教育の中、特に小学校では、言葉遊びの側面を含んだ「教育課題」のリストを別に作ることもできるだろう。

次に、スイスの研究の経験を基にした結果は、図2で示されたように、だいたい大きさも同じで一貫した九つのレベルの尺度を示している。この尺度は A2(Waystage)と B1(Threshold)の間、B1(Threshold)と B2(Vantage)、B2(Vantage)と C1(Effective

Operational Proficiency)の間に段階を設けている。このような狭い間に独立のレベルが存在する可能性は、学習者にとっては関心のあることかも知れない。しかしそれは、試験・テストで通常用いられているような、より広いレベルと関連付けて考えるべきであろう。

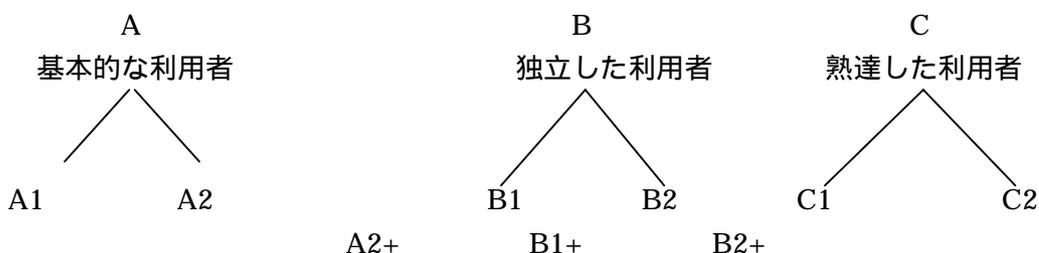


図 2

例示的能力記述文では、「基準レベル(criterion level)」（例：A2, または A2.1 と表記）と「プラスレベル(plus level)」（例：A2+または A2.2)の間に区別がある。後者は総合的聴解の次の例のように、水平線で区切って前者と区別して表示される。

表 4：レベル A2.1 と A2.2(A2+)： 聴解

A2	もしはっきり、ゆっくり発音されるならば、具体的な用件に充分応じることができる理解力がある。
	もしはっきり、ゆっくり発音されるならば、直接に重要な領域(例：ごく基本的な個人や家族の情報、買い物、地元の地理、仕事)に関する語句や表現を理解することができる。

レベルの間の分割点設定は主観的ではない。ある機構・組織では幅の広いレベルをとりたがるだろうし、狭い幅のレベルを好む場合もある。枝分かれ方式の利点は、レベルや能力記述文の共通の枠組みを、それぞれの地域の必要性に応じて、共通の枠組みと連絡を保ちながら、当該地域の利用者の異なった観点で実際的なレベルに分けて行くことが可能な点にある。数字をつければ、主要なチェック対象を見失うことなく、さらに下位分類ができる。このように柔軟な枝分かれ図式によって、それぞれの組織・機構がそれぞれ重要と考える枝分かれを作ることができ、適切なきめ細かさをもった枝分かれができる。そうしてそれぞれのシステムの中で採用したレベルを、共通枠組みの用語を使ってはっきり位置付けすることもできるのである。

例 1：

例えば、小学校や中等教育の低学年、成人学校の夜間クラスでは、低いレベル段階での進歩を目に見える形で与えておく必要が感じられる。そこでは最も学習者が多いと思われる A2(Waystage)をさらに細かくわけ、「基本的な使用者」の系統をおよそ六つの到達点からなる枠組みにすることができよう。

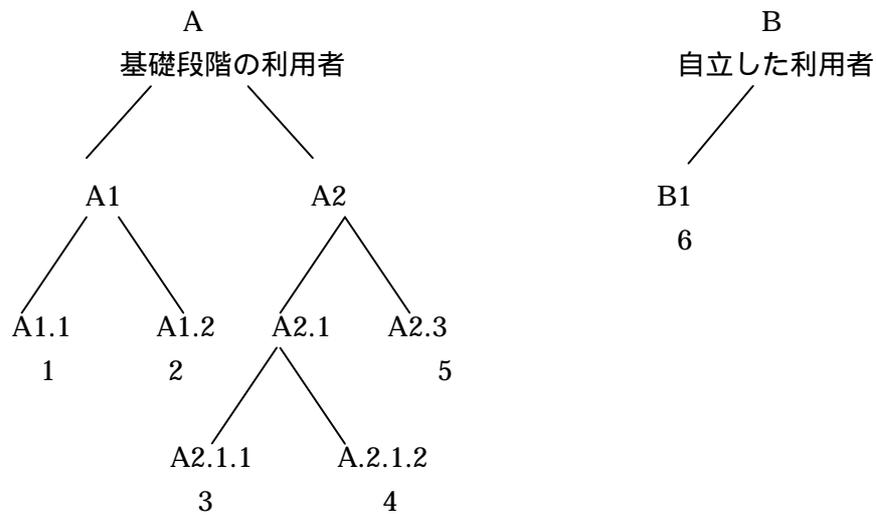


図 3 :

例 2 :

当該言語が話されている地域で学習する場合は、尺度の中央のレベルを細分し、「独立した使用者」の枝を分け、よりきめ細かく分枝を伸ばそうとするかも知れない。

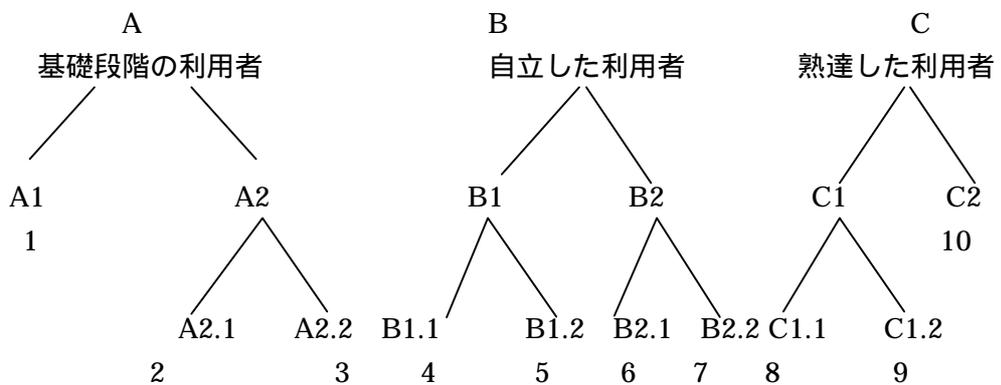


図 4 :

例 3 :

仕事上の需要を満たすための高いレベルの言語技能を養成する枠組みでは、おそらく「熟達した使用者」の枝をさらに分けるであろう。

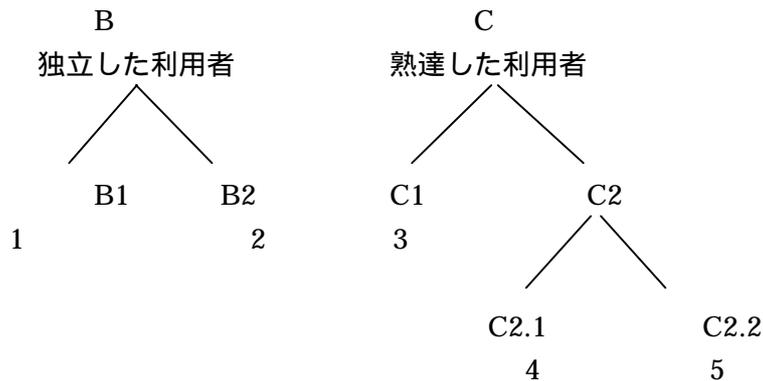


図 5 :

3.6 共通参照レベルの内容の一貫性

尺度で述べられたコミュニケーションの作業課題をこなすのに必要な機能、概念、文法、語彙の分析は、新しい言語項目(language specification)の枠組みを作り出すプロセスの一部となるだろう。

- レベル A1(Breakthrough)： 言語の使い始めの中で最も低いレベルと考えられている。この段階では、学習者は簡単な方法で会話をすることができ、自分自身について、どこに住んでいるか、知っている人々、持ち物について、質問をしたり、答えることができる。直接必要のある分野や身近な話題に関する簡単な意見を言ったり、他人の発言に反応することができる。その際、限定された、練習済みの、語彙化したような、その場の状況にしか使えない言い回しだけに頼らなくても良いだけの力はある。
- レベル A2 は Waystage で言及されたレベルを映し出しているようである。このレベルでまさに社会的な機能に関わる記述の多くが見られるようになる。例えば、簡単な日常的丁寧表現を挨拶に使用する、人に挨拶する、機嫌・調子を聞いたり、ニュースに反応する、社交的な短いやり取りを交わす、工作中や自由時間にすることを尋ねる、招待をしたり、招待の返事をする、何をすべきか、どこに行くべきかを議論して、会う約束をする、申し出をする、申し出を受諾する、などである。ここでは国内及び海外旅行中の記述も見られる：海外で生活している大人向けの Threshold Level の交渉・取り引きに関する項目の完全な形は、単純化され、短くなっている。例えば、店、郵便局、銀行で簡単な取引をする、旅行の簡単な情報を手に入れる、公共の移動手段、バス、鉄道、タクシーなどを使う、基本的な情報を求める、道を聞いたり、教えたりする、切符を買う、日用品やサービスを要求、提供するなどである。
- 次の段階は Strong Waystage(A2+)の能力である。この段階で顕著な面は会話への積極的な参加であるが、その際援助を必要とし、限界もある。例えば、単純で相手の数が多くなく、面と向かっての会話なら、始めることも続けることも終わらせることもできる。そう無理しなくとも簡単な日常のやり取りを何とか維持するだけの理解はできる。もし必要な場合に相手が助けてくれるなら、予測可能な範囲で日常的な身近な話題についての考えや情報を理解し、交換もできる。言いたいことの表現を助けてくれるよう相手に頼めるなら、基本的な話題についてはうまく話し合いができる。メッセ

ージの内容を制限したり、言葉を捜さなくてはいけないことが普通だが、予測可能な範囲の内容の日常的状況に対応することができる。いくらかの援助があれば、形式の整った状況ではそこそこのやり取りが可能だが、自由な議論に加わるにはかなり制限がある。これらに加えてこの段階で顕著な点は、一人で話し続ける能力である。例えば、簡単な言葉で自分がどのように感じているかを表現する。人々や場所、仕事、学習経験などの毎日の周りの事柄について幅広い説明をする。過去の行動や個人的な体験を話す。習慣や日常を説明する。計画や申し合わせを説明する。好きなもの、きらいなものを説明する。出来事や活動の要点を簡単に話す。ペットや所持品について話す。事物や所持品について短い意見を言ったり、比較するために簡単な例示的表現を使う、などである。

- レベル B1 は、外国滞在者のための Threshold Level の項目に対応している。二つの特徴によって大きくカテゴリーが分けられている。最初は、会話を維持し、コンテキストに応じて言いたいことをわかってもらう能力である。例えば、もし話が標準的な言葉遣いではっきりと発音されれば、自分の周りの長い会話の要点を概して把握できる。友人とのくだけた議論で個人的な見方や意見を表明したり、要求できる。分かって欲しいことの要点を表現できる。簡単な言葉を柔軟にいろいろ使って、言いたいことの多くが表現できる。会話や議論を続けられるが、正確に表現したいことを言おうとすると、ついていくことが時には難しくなる。話を続けることはできるが、特に自由に長く話さねばならないような場合に、文法的、語彙的な組み立てや言い直しのための休止が明らかに見られる。第二には日常生活での問題に柔軟に対応できる能力である。例えば、公共の移動手段での非日常的な状況に対処する。旅行会社などで契約をする場合や実際に旅行をしている場合に起こりそうな状況に対応する。身近な話題なら準備していなくても会話に入ることができる。苦情を言う。面接・面談や相談をする場合に、主導権を握る(例えば、新しい話題を持ち出すなど)ことができるが、やり取りとなると相手に頼ることになる。言った内容をはっきりと詳しく述べるように相手に頼むことができる、といった能力である。
- これに続く段階は Strong Threshold (B1+)であろう。同じ二つの特徴がここでも挙げられる。情報交換の量に焦点を当てた能力記述が数多く付け加えられる。例えば、問い合わせや起こった問題の要点をメモにできる。インタビューや相談で必要な具体的情報を与えること(例えば、医師に症候を伝える)はできるが、正確さには限界がある。問題の理由を説明する。短い物語、記事、談話、議論、インタビュー、文書の記録を要約し、自分の意見を提示し、詳細について質問に答える。用意してインタビューを行い、情報をチェック、確認できるが、相手の応えが速くて長い場合には、時には繰り返すことを要求するかもしれない。細かい指示を出してやり方を説明できる。自分がわかる範囲の身近で日常の事柄について、まとまった事実の関係のある程度の確かさで交換できる。
- レベル B2 は、B1(Threshold)の上位レベルだが、B1 と A2 (Waystage) のレベル差と同じくらいの違いが B1 との間にある。意図としては Vantage Level の項目に対応するものになっている。比喻を借りて言えば、歩みはゆっくりとしているが、着実に中腹の高原に達しているので、学習者はどこかに到達したような気になり、物が新し

く見え、新しい視点を得る。それ故、周りを新たに見渡せる。この言い方はある意味でこのレベルを測定する能力記述文が生み出した感がある。つまり、これらの能力記述文はこれまでとは大きく内容が違っているのである。例えば、この段階の低い方の端には効果的論述に焦点が当てられている。自身の意見の補強のため、維持のために重要な説明、根拠、コメントを提示できる。様々な観点から長所と短所を示して、問題に関する見解を述べる。筋道の通った議論の流れを作る。特定の視点に賛成あるいは反対の理由を展開できる。交渉の相手から譲歩を引き出せるように問題をはっきり説明できる。原因、結果、仮想状況を推測できる。慣れた状況の、くだけた論議に参加し、コメントをし、自分の視点をはっきりと述べ、他の人の提案を評価し、仮説を提示し、また仮説に意見を述べるなどして積極的な役割を担う。次に、そのレベルを通して、二つの新しい焦点がある。最初の一つは、社交的な談話の中で自分の立場を守る以上のことができることである。例えば、自然に、流暢に、そして効率よく会話を交わす。騒音のある環境の中でも標準的な話し言葉で自分に言われた内容はちゃんと理解できる。話を切りだし、適宜発言にまわり、必ずしも優雅にはいかないまでも、必要なときに会話を終わらせることができる。言いたいことをまとめているときに時間稼ぎをして、発言権を相手に渡さないための定型表現(例:「それはなかなか答えにくい質問です」)を使える。お互いに緊張を感じずに母語話者と普通の会話が可能で、かなり流暢に自然なやり取りができる。普通に会話で見られる話題転換、文体、力点の変化に合わせられる。母語話者同士ではしないような振る舞いを相手に要求したり、相手を不用意に笑わせたり、困惑させたりしないで、母語話者の話し相手との関係を維持できる。二つ目の新しい焦点は新たな高い言語意識(感覚)である。誤解を招いた場合間違いを修正する。「お得意の間違い」を覚えておいて、意識的に会話での間違いをしないようにする。気がついた言い損ないや誤りを訂正する習慣をつける。言うことや発言が持つ意味を、相手の受け取り方も考えながら組み立てる。これらは全て、この段階に達した言語の学習者への新しい「しきい」となるものである。

- 次の段階は Strong Vantage (B2+)の能力を表している。B2(Vantage)での議論、効果的な社交的談話、言語感覚に引き続き焦点が合わせられている。しかしながらそれは同時に、ディコース技能へつながる新しい焦点としても解釈される。この新しい談話能力のレベルは会話の管理(協調の方略)によくあらわれる。感想を言う、発言を補完する、他の話し手の発言を配慮し、議論の発展に寄与できる。他の話し手の発言に自分の発言をうまく関連付ける。また、これは明らかに一貫性や結束性にも関連する：使える数は多くないが、結束表現を上手に使って文をつないで明快な談話にまとめる。考えと考えの間の関係を明確にするため、いろいろな語を用いて効率よくつなげる。重要な論点とそれを支える論拠を強調しながら、体系的な議論を展開する。最後に交渉に関する事項が集中して一連のリストに加わる。補償する場合のあらましを述べる、説得的言辞と単純な論拠を使って満足を得られるようにする。譲歩の限界をはっきりと述べる。
- レベル C1 という次の段階は、効果的に操作可能な熟達度(Effective Operational Proficiency)と名づけられている。この段階を特徴づけるのは幅広い多様な言語の運用能力である。そこでは、以下に挙げる流暢で自然なコミュニケーションが可能である。

ほとんど苦労しないで流暢に自然に自分を表現できる。言い換えによって、欠けたところを十分補えるだけの豊富な語彙がある。表現を捜しているようにはほとんど見えないし、回避方略(avoidance strategy)を取っているような印象もまず与えない。概念化が困難なときにだけ、自然で滑らかな言葉の流れが阻まれる。前の段階を特徴付ける談話技能は C1 レベルでもそのまま当てはまる。ただここでは流暢さがより強く求められる。例えば、自分の意見を言う前に、談話機能を持つ豊富な語句の中から、適切なものを選択して、考えている間にも、時間稼ぎをして、発言権が保持できる。構成がはっきり分かるような文句や接続表現、結束表現をうまく使いこなしながら、はっきりとしたなめらかな、メリハリのある話ができる。

- レベル C2 は「熟練レベル」(Mastery)と称されてはいるが、母語話者が、それに近い能力を意味しているわけではない。意味していることは、達成度の非常に高い学習者の話に典型的に現れる言葉の正確さ、適切さなどである。ここで計られる能力は次のとおりである。いろいろな表現の可能性を駆使して細かい意味のニュアンスを正確に伝える。コノテーションを承知した上で慣用的な表現、俗語を使いこなせる。難しいところは上手に戻って言い直すので、相手はほとんど気がつかない。

共通参照レベルは形式を変え、精度を変えて使っても良い。しかし、共通枠組みのような定点の存在は明確さと一貫性を与え、これからの開発にとって計画性と基本的な道具を提供するものだろう。学習計画を作る際にそれぞれが状況に合わせた使用ができるように、能力記述文に具体的な実例を加え、能力記述文を改良するための検討事項と方法を提示してある。

3.7 実例を含んだ能力記述文の尺度の読み方

第 3 章で紹介された六つのレベルは、次の A1(Breakthrough)、A2(Waystage)、B1(Threshold)、B2(Vantage)、C1(Effective Operational Proficiency)、C2(Mastery) の通りであった。尺度の中位レベルである Waystage, Threshold, Vantage は上の節で示したようにさらに細線で分けられることがある。この場合、線の下の記事文が該当する基準レベルを表している。線より上の記事文は、基準レベルで示されたものより明らかに上位レベルの熟達度を定義している。しかしそれは、さらに上のレベルに達しているわけでもないことを意味している。この区別の基礎は経験に基づくものである。A2(Waystage)、B1(Threshold)、B2(Vantage)で、より細かい分類が示されていない場合は、その説明したレベル全体の基準を示している。この場合は二つのレベルの間に相当する基準の記事はない。

人によっては、尺度を低いレベルから高いレベルに向かって読むのを好むだろうし、逆の場合もあるだろう。整合性を持たせるために、全ての尺度は C2(Mastery)を最上位に置き、A1(Breakthrough)を最下位に置くことにする。

どのレベルも下位のレベルを取り込んでいることになる。すなわち、B1 のレベルにいる人は A2 で記述されていることは全てでき、しかもより上手にできるはずである。A2 にある留保、例えば、「もしはっきりと話が発音されれば」ということは B1 にはあまりあて

はまらない、ないしは適用されないことを意味している。

ある能力記述文で取り上げられている言語の要素や側面は、それより上位の能力記述文で全てが繰り返されるとは限らない。すなわち、どのレベルの記載事項も、そのレベルで重要かつ新しい事項を記述することになる。下位のレベルで言及された全ての要素を体系的に繰り返し、能力記述文の内容を少しずつ変えて、要求が高くなっていることを示すやり方は採っていないのである。

全ての尺度の中で各レベルが記述されているわけではない。あるレベルである分野がないからといって、そこから何か結論を引き出すのは難しい。というのも、以下のさまざまな理由の一つが原因になっているかもしれないし、それらの組み合わせが原因になっているのかもしれないのである：

- ・ この分野はこのレベルでも存在しないわけではない。能力記述文の或るものは研究プロジェクトでは取り上げられていたが、質的な検討の段階で脱落した。
- ・ この分野はおそらくこのレベルに存在するだろう。能力記述文を書くこともできるだろうが、実際には書かれていない。
- ・ この分野はこのレベルに存在するかもしれない。しかしその言語化は不可能でないにせよ、とても難しい。
- ・ この分野はこのレベルには存在しないし、重要でない。ここでは区別できない。

もし、この能力記述文の一覧を活用しようとするなら、示された能力記述文間のギャップについてはどう対処すべきか考慮する必要があるだろう。これらのギャップは、当該のコンテキストのなかで記述文を精緻化することによって埋められるかもしれないし、あるいは利用者自身が使っているものから材料を取ってくることにより埋められるかもしれない。一方で、ギャップの中の或るものについては - 当然ながら - そのままになるであろう。ある種のカテゴリーは上下のレベルのどれにも関連していないこともあるのである。一方、ある尺度の真ん中にあるギャップは、区別に意味があっても、そう易々と文章化できないことを示している。

3.8 言語熟達度の能力記述文尺度の使い方

共通参照レベルは言語熟達度の尺度を表 1、2、3 で例証している。このような尺度の開発に関わる技術的な問題は付録 A で論じられている。第 9 章は言語熟達度を評定するために、共通参照レベルの尺度を利用する際の用い方を詳しく述べている。

しかしながら、言語熟達度の尺度を議論する際に重要な事柄は、尺度を使う目的が同じであることと、尺度として使われている能力記述文の内容と目的が十分な合致を見ていることである。

三つのタイプの機能上の区別が熟達度の尺度の間でなされている。(a) 利用者中心 (b) 評定者中心 (c) 出題者中心(Alderson 1991)である。一つの機能のためにデザインされた尺度が他の機能のために用いられた場合、能力記述文の内容が適切でない限り、問題であろう。

(a) 利用者中心の尺度(user-oriented scales)はそのレベルでの学習者が典型的に起こしうる行動を写している。低いレベルでも学習者は何が出来るか、肯定的な言葉を用いて述べるようにしている。

丁寧にゆっくりと話してもらえると簡単な英語が理解できる。また、短いはっきりとした簡単なメッセージやアナウンスの要点を捉えることができる。(Eurocentres certificate Scale of Language Proficiency 1993: 聴解レベル²)

しかし、限界の記述もある。

単純な日常の仕事や日常的な状況なら、何とかコミュニケーションができる。辞書の助けがあれば簡単な書かれたメッセージを理解できる。辞書が無くても要点は理解できる。言語熟達度が低いため非日常的な状況下では頻りにコミュニケーションが途切れたり、誤解が生じる。(フィンランドにおける言語熟達度の九つのレベル 1993: レベル 2)

利用者中心の尺度はしばしば総合的になり、一レベルに一つだけ記述文がつく程度である。参照したフィンランドの尺度はこのタイプである。共通参照レベルを紹介するために本章の最初で示した表 1 でも、それぞれのレベルで典型的な熟達の実例をまとめて総合的に使用者に提示してある。上掲のヨーロッパセンターの尺度にあったように、使用者向けの尺度は、四技能を記録してはいるが、簡潔さをもってその尺度の主要な特徴としている。

(b) 評定者中心の尺度(assessor-oriented scales)は評定の段取りをも提示している。期待されている能力の質という側面からの表現が典型的である。ここで意味するのはある特定能力についての総括的熟達度である。このような尺度では、いかに上手にできるかという点に焦点が置かれ、特に能力記述文の内容がある試験の合格基準に関係している場合には、上位のレベルでも否定的な表現が用いられることもある。

途切れ途切れの話や頻りに起きる言いよどみがコミュニケーションの障害となり、常に聞き手を緊張させる。

(Certificate in Advanced English 1991 (University of Cambridge Local Examinations Syndicate), Paper 5 (Oral) Criteria for Assessment : Fluency : Band 1 - 2(四つあるレベルの一番下))

しかしながら、尺度作成グループの協力者による典型的な言語運用の事例の分析、記述

² 本章で言及されている尺度は全て、以下の書で出典と共に詳細に論じられている: North, B. (1994) Scales of Language proficiency: A survey of some existing systems. Strasbourg, Council of Europe CC-Lang (94) 24.

を利用する、質的发展のアプローチを採用するときは、否定的な表現はかなり避けることができる。

評定者中心の尺度のあるものは総合的になり、レベルごとに一つ一つ記述がつくだけである。一方で、使用領域の幅、正確さ、流暢さ、発音のような異なる能力の側面に焦点をあてる分析的な尺度もある。本章の最初で示した表3は、CEFの例示的能力記述文から引き出された、肯定的に表現された評定者中心の分析的尺度の例である。

分析的な尺度の中には達成度を概観するために数多くのカテゴリーを設けるものがある。このようなアプローチは評定にはあまり向かないと言われている。というのも評定する際に3-5以上のカテゴリーに対処するのは難しいと分かっているからである。表3のような分析的な尺度は診断型(diagnosis-oriented)だといわれている。なぜなら、その目的は、一つには、現在の状態を概観し、関連カテゴリーの中で目標を提示し、その目標達成に必要な項目を診断することである。

(c) 出題者中心の尺度(creator-oriented scales)は当該レベルのテスト作成の指針を示してくれる。この尺度の特徴は、項目記述を学習者がテストで要求される特定のコミュニケーション課題の形にしてあることである。このタイプの尺度、あるいは項目リストも、何ができるかに焦点を集中させている。

自分の家族、住居環境、学歴について細かい情報を伝えることができる。自分の置かれた環境で日常の事柄(例:自分の住んでいる家の郊外、天気)を説明し、会話を交わすことができる。現在もしくはごく最近までやっていた仕事、活動について説明できる。仕事の同僚や直接の上司と現場でコミュニケーションが取れる。(例:仕事について質問する、労働環境について不満を言う、休みなど)電話で簡単な伝言を伝える。日常生活での簡単な仕事について(例:店員に)指示や説明を与える。不安定ながら、丁寧なお願いの形式(例:could や would を文中に含む)を用いることができる。無関心さや攻撃的な態度が不用意に出てしまって相手の気分を害するかもしれないし、あるいは母語話者が形式ばらないことを望んでいる場面でへりくだりすぎて相手をいらつかせることがあるかもしれない。

Australian Second Language Proficiency Ratings 1982; Speaking; Level 2:
Examples of Specific ESL tasks (三つあるレベルの一番下)

この総合的な能力記述文は、情報の交換(私的領域;職業の領域)記述、会話、電話、指示・命令、社会文化)といったカテゴリー別に解体され、その構成要素が与えられることもある。

最後に、教師による継続的評定や自己評定のためには、能力記述文のチェックリストや尺度が、学習者は何ができるかだけでなく、どの程度上手にそれができるかについても触れていけば、非常にうまく機能する。学習者がどの程度上手に課題をこなすかについて適切な情報を含むことができないと、イギリスのナショナル・カリキュラムやオーストラリアのカリキュラム・プロファイルの初期の形に問題が生じたのと同じことになる。教師は一方で、(出題者用尺度と関連した)カリキュラムに基づく課題に関する詳しい情報を欲し

がるし、その一方で (診断的尺度と関連した)質的な基準に関する詳しい情報を欲しがるといえる。それぞれのレベルで課題をどれだけ上手にやり遂げられねばならないかについて示すことができれば、自己評定のための能力記述文は特に効率的なものになるだろう。

まとめると、言語熟達度の尺度は次の一つかそれ以上の方向性があるものとして考えなくてはならない。

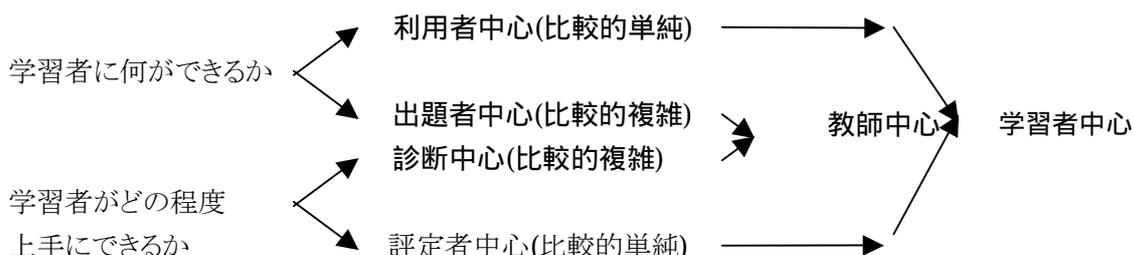


図 6

これらの方向性は全て共通の枠組みに重要であると考えられる。

上で論じられた方向性を見るもうひとつの解釈は、利用者中心尺度は、全体を概観するためにある出題者中心尺度を縮刷版にしたものであると考えることである。同様に、評定者中心の尺度のあるものは、評定者が全体を見渡すのに役立つ診断中心尺度の縮刷版であろう。利用者中心尺度のあるものは、詳細に記述されたものをまとめて、その論理的帰結としての概観が示せるようにしてある。その上で、総括的な尺度の形を取って、各レベルでの典型的な完成型を記述している。ある場合には、詳細を報告する代わりにこの総括的方法が採られる (例：上掲のフィンランドの尺度)。あるものは、一つ一つの技能に付与された数値に意味を認めている (例：IELTS: International English Language Testing System)。また、もっと詳細な能力記述文への導入や概要の役割を果たしているものもある (例：Eurocentres)。どの場合も、捉え方はコンピュータのハイパーテキストの表示方法と類似している。利用者には情報のピラミッドが提示され、階層構造の(ここでは「総合的な」尺度)の頂点を見ることで全体が分かる。システムの下の段階にいくにつれて詳細になっていく。しかし、どの場合でも 1,2 枚の紙面上に、もしくは 1-2 の画面上で見られるものに収められている。このように複雑な全体も提示されうるし、関連性のない情報で利用者を幻惑しないようになっていると同時に、陳腐なまでに単純化されてしまってもいい。もし必要なら詳細は別のところで見られるようになっている。

ハイパーテキストは説明体系を考える上で非常に使い勝手の良い比喻である。外国語としての英語の試験のために ESU(English-speaking Union)の枠組みでとられているアプローチはまさにこれである。第 4 章、第 5 章で示した尺度もこのアプローチの発展形である。例えば、コミュニケーション活動との関連で言えば、やり取りの尺度はこのカテゴリーの下位尺度のまとめである。

本書の利用者は次の点を考慮し、必要とあれば、その結果を表明するとよいだろう。

- 学習目標、シラバスの内容、教師の指針、継続的評定のための課題と、レベルに対する学習者の関心が、どの程度まで関連しているか(出題者中心)。
- 各レベルの技能を規定する詳細な基準が与えられることによって得られる評定の一貫性の強化と、レベルに対する学習者の関心とが、どの程度まで関連しているか(評定者中心)。
- 各レベルの技能を規定する詳細な基準を与えて(評定者中心) 雇用主、他の教育機関、保護者、学習者自身向けの成績報告が書かれる場合(利用者中心) それぞれがレベルに対する学習者の関心とどの程度関連しているか。
- 雇用主、他の教育機関、保護者、学習者自身への報告と、レベルに対する学習者の関心とが、どの程度関連しているか(利用者中心)。

3.9 熟達度のレベルと達成度の成績

共通参照レベルのような熟達度のレベル定義と、特定のレベルにおける目標達成度の評定との間に、尺度に関する重要な区別がなされねばならない。熟達度の尺度は、共通参照レベルがそうであるように、熟達度の上昇度を定義する。それは、全概念領域をカバーしているかもしれないし、関係する分野や制度に応じた熟達度の領域を押さえているだけかもしれない。レベル B2 として評定されることは(二ヶ月前に B1 として評定された)一人の学習者にとってはかなりの達成度を示すかもしれないが、(二年前に B2 としてすでに評定された)一人の学習者にとっては並の能力だとも言える。

熟達度の尺度

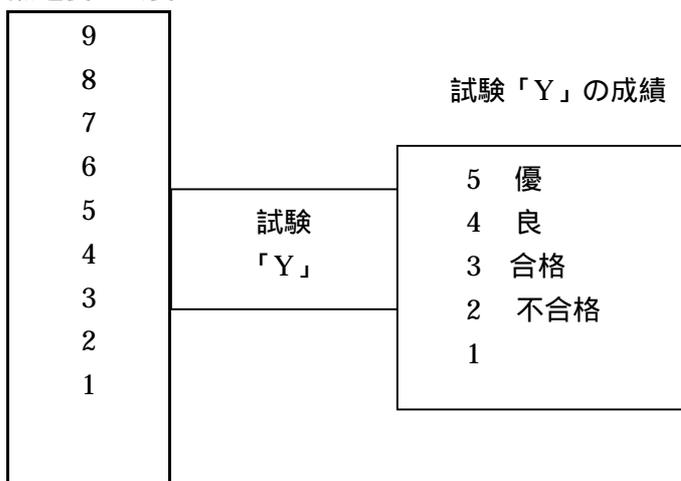


図 7 :

目標をどこかのレベルに設定するでしょう。図 7 では試験「Y」は熟達度尺度でレベル 4 と 5 で示される等級をカバーすることになっている。別のレベルを対象にした別の試験があるだろう。そうした試験の間関係をはっきりさせるには、熟達度尺度を用いればよい。外国語としての英語の試験用の ESU の枠組みや、異なるヨーロッパの言語の試験をお互いに関連づける ALTE の計画の背後にある考えはこれである。

試験「Y」での達成度に成績をつければ、1 - 5 の間で 3 が合格ラインを表している。このような成績の尺度は、「話す」や「書く」の試験のような、主観的に点数をつけて出来具合を直接評定する場合にも用いられるし、テスト結果を知らせるのにも使われるだろう。試験「Y」は一続きの試験「X」「Y」「Z」の一部であるかもしれない。どの試験でも同じスタイルが採られても不思議ではない。しかし、明らかなのは、試験「X」での 4 の評価は言語熟達度の観点から言えば、試験「Y」の 4 の評価と同じ意味を持っているわけではないということである。

もし、試験「X」「Y」「Z」が一連の共通の熟達度尺度上に置かれているのなら、一つの試験の成績と他の試験の成績との関係を確立することが可能であろう。これは専門家の意見の蓄積、項目の分析、公開された試験問題・回答例と、試験の受験者の成績とを比較した上で達成できることである。

定義上、試験には基準があり、その基準を解釈できる訓練された評定者の集団がついてるので、上述のような方法で試験の成績と熟達度のレベルの関係を確立することができる。共通の基準を明示的で明確なものにし、基準を客観的に扱えるように実例を与え、尺度化する必要がある。

多く国々の学校での達成度の評定は、達成度の成績(Noten)によってなされる。それには 1 から 6 の 6 段階があり、4 が合格ライン、基準達成、「可」とされる。さまざまな成績の意味は当該の環境にあって教師に内在化されており、定義されていることはほとんどない。教師の成績評価と熟達度レベルとの関係は、試験の成績と熟達度レベルとの関係と基本的に同じである。しかし、極めて多面的な基準が存在するという事実によって、ことはさらに複雑になる。その理由は、用いる評定形式の問題や、それぞれの状況次第での教師による成績の共通解釈の程度は別にしても、様々な教育制度の地域の学校ごと、学年ごとに、自然に異なる基準が作りだされているからである。第 4 学年の終わりの「4」は、明らかに同じ中等学校での第 3 学年の終わりの「4」とは意味が異なる。また、第 4 学年の終わりの「4」は二つの異なる種類の学校では同じものではないのである。

それにもかかわらず、ある分野で用いられている基準の種類と熟達度のレベルの間に、おおよその関係を設定することは可能であろう。これを達成するには技術的累積が必要である。つまり、同じ目標に対するさまざまな達成度の基準定義を示さなければならない。教師はまた、平均的な達成度を表 1、2 のような、既存の熟達度尺度に置き換えることを求められるかもしれない。代表的な運用例を集めて、連続した尺度に当てて測定することもできる。教師はまた、すでに標準化された言語運用例のビデオを、普段生徒に対して使っている成績で評価してみることも要求されるだろう。

本書の利用者は次の点を考慮し、必要とあれば、その結果を表明するとよいだろう。

- システム全体の中で熟達度の進歩を記録するための一連の概観図を定着させることに、教師がどの程度まで関心があるか。
- ある特定の熟達度レベルの達成度に対して、テスト結果又は教師評定による成績をつける際に、予め明白な規範を与えておくことに、教師がどの程度まで関心があるか。
- 一連の教育機関、熟達度のレベル、自分たちの制度内の評定形式の間に、一貫した関係を作り出すために、共通の枠組みを開発することに、教師がどの程度まで関心があるか。